

後ろ

会月 紗衣

振り向けるはずなかった。

ペダルを漕ぐ足に異常なほど力をこめる。暗くてどのくらいか、その速さが出てくるのかわからない。あるいは止まっているのか。それにさっきから、自分の心臓の音がうるさいほど響いている。

とつくに深夜二時をまわって、当然ながらあたりに人影はない。街灯さえまばらな、暗い田舎道を自転車で走る。

こんなことなら、飲み会なんか行くんじゃないかった。

その後悔しても、いまさら状況は変わらない。深夜に自転車に乗って家路を急ぐ俺と、さっきまでなにもなかった自転車の荷台。

この女は誰だ。

荷台に腰掛けている誰か。いや、何か。背後に気配を感じて、そして次の瞬間にはもう、いた。

ひんやりと、嫌な汗が背中をつたう。九月だと言うのに、体の芯が凍えて、呼吸が浅くなる。

横向きに腰掛けた、華奢な足が見える。街灯の明かりのせい、心なしか青白いように思える。

絶対振り向いてはいけない。

直感と言うより、本能でそう感じた。

いつもはあんなにうるさい蛙の音が、今日に限ってまったく聞こえない。しんと静まり返った町。宵闇にただ自転車の音と、自分の息遣いだけが聞こえる。そして、もしそれ以外の何かが見えたら、もう耐えられない。

雲の切れ間から、月光が差す。月明かりでますます、青白く透き通るような肌が気味悪いほどに映える。この先の道は、ほとんど街灯のない真っ暗な通りだ。せめて月明かりのあるうちに少しでも進んでおきたい。ペダルを漕ぐ足に、力をこめる。この通りを抜ければ、家はもうすぐだ。

しかし、たとえ無事に家に着いても、それからどうするかは考えていなかった。今はただ、力のかぎり自転車を漕ぐ

こどしか頭にない。もどかしいほどにゆっくりと、加速していく。二氣に通りを駆け抜けようとして、そして。

後ろで、うごいた。

横座りしていた足が、荷台をまたいで。

つめたいなにか。

ほそい腕が、腰に巻きついて。

氷よりもつめたい。

ああこれは、生きてない。ああ、振り向いてはいけない。

そしてなにか、心臓まで凍えさせるようなつめたい、やわらかいなにか。感覚が廃れるような恐怖で、なにも考えられずにひたすらに走る。真っ暗。いつの間にか月は隠れていた。あと少し、あと少しで家に帰れる。だからうっかり忘れていた。

カーブミラー。

この道の先、カーブミラーがあった。

鏡。

振り向いてはいけない。

見てはいけない。

というのは遅すぎた。

「…それで、どんな顔だったんだよ、その幽霊。やっぱ美人だった？」

この恐怖体験を聞いて、こいつが唯一食いついたのはそこだった。

それが…消えちゃってさあ。ちょうどカーブミラーに映るってとこで

消えたあ？ なんだつまんねえの。それで、なんか祟りとかねえのかよ

他人事だと思っただけ好き勝手言っている。

あれからお寺とかいろいろ行ってみただけど、何にも憑いてないってさ。でも、俺はもう二度とあの道は使わん」

まあ、呪い殺されなくてよかったな。それに、いい思い出になっただろ」

ぶざけるなよ。本気で死ぬかと思ったんだぞ」

憤るも、こいつはいけしやあしやあと言っただけだ。

女と自転車二人乗りなんて、いい思い出じゃねえか」